

# 「小笠原盆踊り」の成立と発展

小西 潤子（沖縄県立芸術大学音楽学部）

## 要 約

本稿では、父島の「小笠原盆踊り」が1968年小笠原諸島返還後、いかに形成されいかなる意味を帯びてきたのかを小笠原青年協議会の活動に注目し、1. 萌芽期、2. 返還踊り期、3. 《小笠原音頭》の転換期、4. 観光資源化とブランド化の4つのフェーズから論じた。そして、返還記念祭が村民参加型エンターテインメントとしての性格を強めていったこと、返還10周年以降の記念行事開催時期の限定に伴って踊りの転換が生じたこと、国の施策によって小笠原盆踊りが観光資源化、ブランド化し踊り歌に変化が起こったことなどを明らかにした。さらに、小笠原盆踊りを巡って人々の間に「死者の歓待と鎮送」という原点回帰が起こっていることを論じた。

## I. はじめに

盆踊りは、日本の国民的な踊りである。人気アニメとタイアップした子ども盆踊りから定番の《炭坑節》まで、老若男女に向けたさまざまな演目がある。沖縄のエイサーも、日本本土から伝わった盆踊りである。盆踊りは元来、旧暦7月15日前後数日の盂蘭盆会という仏教行事で、祖先歓待と鎮送のための踊りであった（西角井、1999: 551）。盂蘭盆会は、釈迦の弟子・目連尊者が救母のため地獄めぐりをしたことから始まったとされる。盆を過ぎたころ寺院では施餓鬼を行い、有縁無縁の新仏中心の亡霊を弔う（田中、1999）。地域によっては、盆踊りのことを供養踊（大分県・三重県の一部）、亡者踊（名古屋）、精霊踊（京都・徳島）、三味〔墓地〕踊（淡路島）などと呼ぶ（小寺、1941: 6-7）。

7世紀国家の仏教行事として始まった盂蘭盆会は、13世紀頃には「聖」集団による「踊り念仏」とセットとなる（坂本、2016: 121-122）。15世紀に入ると、庶民や農村の百姓らが盂蘭盆や盆供を始める（坂本、2015: 69-73）。現在につながる芸能としての盆踊りは、江戸時代までに全国に広まり、「盆まつり」「盆の神踊」など神事の踊りとなったものもある（小寺、1941: 4-5）。一方、江戸幕府は、17世紀半ば頃から盆踊り統制を始め、18世紀初めには、秩序を乱し交通の妨げになることを理由に盆踊り禁止令を出した。地方でも、19世紀初めには同様の動きが見られた。明治政府も、風紀の乱れや欧州並みの文明国になる妨げを懸念し、盆踊り禁止令を出した。ところが、大正末期から昭和初めになると全国郷土

舞踊民謡大会の開催と相まって、盆踊りは全国的に復興した。と同時に、歌詞の改編や東京の作詞作曲家による盆踊り歌の新作も盛んになり、プロの歌手が吹き込んだレコードが全国に普及した。その代表が1934年に大ヒットした《東京音頭》であった（小寺、1941: 98-110）。

ここでいう「小笠原盆踊り」とは、1968年小笠原諸島返還（以下、原則として返還と表記）後から形成されてきた父島の「盆踊りイベント」のことである。盆踊りといえども、小笠原諸島において盆踊りは一度も仏教と結びついていない。元々無人島であったところに、1830年最初に入植したのは、非仏教徒の欧米や太平洋諸島出身者であった。19世紀後半に八丈島からもたらされた歌や踊り、太鼓の演奏も神社の祭りに結びついていた。本稿では、独自の歴史的背景をもつ小笠原において、いかなる経緯でイベントとしての小笠原盆踊りが始まり、現在に至っているのか、そしてその過程で、いかなる意味を帯びてきたのかを論じる。

## Ⅱ . 小笠原盆踊り

### 1. サマーフェスティバルと小笠原盆踊り

今日では、さまざまな行事や結婚式のような祝儀の場でも、盆踊り系の踊りが披露される。国指定重要無形民俗文化財の西馬音内盆踊り（秋田県）、郡上八幡盆踊り（岐阜県）、阿波踊り（徳島県）も、観光資源としての期待を込めて日本三大盆踊りと称される（日本全国「三大祭」ガイド、2020）。小笠原諸島においても、鼓舞の会（踊りの同好会）が中心となって、小笠原村返還記念行事（以下、原則として返還記念行事と表記）、大神山神社例大祭、敬老会、自衛隊の交代式などさまざまな機会に「盆踊り」の演目が披露される。これらのように祝祭や奉納、歓待などの目的に付随する上演とは異なり、「小笠原盆踊り」は踊ることそのものを目的とするイベントである。

小笠原盆踊りは、「サマーフェスティバル」の一環として、父島の大神山公園大村中央地区で行われる。踊ることを目的に、東京都心から来島する観光客も多数おり、中には7年に渡って通っているリピーターもいるらしい（60歳代関係者による私信、2019）。その人気に応えるため、返還50周年にあたった2018年と翌2019年は、竹芝栈橋（東京都港区）でも小笠原盆踊りのパフォーマンスが行われた。

2019年7月20日～8月31日のサマーフェスティバルでは、小笠原盆踊り以外にも、野外映画上映会、南洋踊り & KAKA（小西、2002）、ウミガメ放流、星空観望会（別日程で2回）、山田ケンタ in 小笠原「ステージ & 和太鼓ワークショップ」が行われた。小笠原盆踊りは、練習2日間（8月7日～8日、各1時間30分）、本番3日間（8月9日～11日、

各2時間30分)の予定が、台風10号の影響により急遽それぞれ1週間延期され、花火大会も中止された。この他、JAMMIN(村民音楽イベント)、フラ・オハナ(小笠原フラの披露)、ビーチバレー大会などが行われた年もある。

## 2. 小笠原盆踊りの様式と演目構成

小笠原盆踊りは、村民と共に観光客も一般参加者として、自由に踊りの輪に加わることができる「参加型」である。練習参加者には、主催者である小笠原サマーフェスティバル実行委員会より「小笠原盆踊りマスター」の認定書が授与される(図1)。練習に先立って、お祭り会場には2段式の櫓が仮設される。本番では、上の段では太鼓の演奏が行われる。1998年頃からは、ボニン囃子(小笠原村文化系サークルの1団体)による太鼓の回し打ちが主に行われているが、八星流太鼓の演奏も行われている。それ以前は、3つの盆踊りの太鼓曲のうち、1曲ずつを同じ奏者が演奏していた(60歳代関係者による私信、2019)。下の段では鼓舞の会のメンバー等が踊り、一般参加者は櫓の周りを何重にも取り囲んで踊る。小笠原村観光協会(以下、観光協会と表記)から法被の貸し出しもあるが、Tシャツに半



図1 小笠原盆踊りマスター認定書

2019年8月筆者撮影。



図 2 櫓を囲んで踊る人々

2019年8月 筆者撮影。

ズボン姿の若者も多い（図2）。その外側では、参加者がブルーシートや観光協会が貸し出すゴザを敷いて、休憩や飲食をする（図3）。さらに、外周にはテントが立てられ、村内の飲食店らが軽食や飲み物、土産物を販売するほか、子ども向けのゲームコーナーも設けられる（図4）。このように、小笠原盆踊りは、踊りと夜店がセットになったイベントなので



図 3 ゴザに座ってくつろぐ人々

2019年8月 筆者撮影。



図4 夜店に集まる子どもたち

2019年8月 筆者撮影。

ある。

踊りの演目には、〈炭坑節〉〈東京音頭〉〈1たす1の音頭〉や子ども向けの〈動物音頭〉といった全国的に親しまれているものに加えて、小笠原オリジナルの〈小笠原音頭〉〈まっこう音頭〉〈世界遺産音頭〉などがある。基本的には、拡声器から流す録音音源に合わせて太鼓打ちがされ、あらかじめ定まった振りつけで踊られる。即興的にうたう演目がないため、主催者側は上演時間を管理しやすい。

全体の演目構成としては、2019年8月16日（本番）では次のようであった。

- ①〈炭坑節〉、②〈動物音頭〉×2回、③〈まっこう音頭〉×2回、④〈1たす1の音頭〉×2回、⑤〈東京音頭〉×2回、⑥〈小笠原音頭〉×2回、⑦〈炭坑節〉、⑧〈動物音頭〉×2回、⑨〈1たす1の音頭〉、⑩〈東京音頭〉、⑪〈まっこう音頭〉、⑫〈小笠原音頭〉×2回、休憩、「赤ポッポ」「母島メグロン」「元祖赤ポッポ」のゆるキャラによるアトラクション（海上自衛隊）、⑬〈世界遺産音頭〉、⑭〈東京音頭〉（八星流太鼓奏者による独奏）、⑮〈動物音頭〉×2回、⑯〈1たす1の音頭〉×2回、⑰〈炭坑節〉×2回、⑱〈まっこう音頭〉×2回、⑲〈小笠原音頭〉×2回、⑳同アンコール×2回

演目の指示は、観光協会スタッフである司会者のアナウンスによってなされた。

### 3. 調査の方法

イベントとしての小笠原盆踊りは、1968年の返還以降、次第に現在のようになった。しかし、その経緯についての記録はない。そこで、2019年8月7日～8月18日父島にて関係資料および情報収集を行った。小笠原村総務課からは文献資料とそれに基づく基礎データの提供等の調査協力を得た。そして、踊り歌の伝承者、踊りの指導者、踊り手や太鼓演奏者、新曲や新しい振付の創作および編集者、小笠原青年協議会（以下、青年協議会と表記）立ち上げ時からの会員ら関係者から聞き取りを行った。また、同年の小笠原盆踊りの練習と本番を参与観察した。

本稿では、小笠原盆踊りの成立史を追うことが目的である。そのため、聞き取り情報の扱いについては、関係者の年齢を年代表記するにとどめた。

## Ⅲ. 返還踊りから小笠原盆踊りへ

父島で櫓を立てて盆踊りの演目を踊るようになったのは、1972年に青年協議会が始動してからだとされる。青年協議会は、小笠原盆踊りの成立にいかに関与したのか。また、どのような経緯で小笠原盆踊りが確立したのか。ここでは、1. 萌芽期（1968-1974）、2. 返還踊り期（1975-1979）、3. ≪小笠原音頭≫の転換期（1980-1985）、4. 観光資源化とブランド化（1986-）の4つのフェーズから、小笠原盆踊りの成立と発展について整理して論じる。

### 1. 萌芽期（1968-1974）

返還元年から同6周年にあたるこの時期には、イベントとしての小笠原盆踊りの萌芽が見られた。返還後、小笠原諸島ではインフラ整備や帰島者受け入れ態勢の構築、増大した島内外との交流行事の企画運営などの課題に直面した。そこで、若者が父島で自主的に青年協議会を発足して、それらの対応にあたった。本節では、その活動から踊りのイベントが生まれた1975年までを範囲とし、1972年の青年協議会の設立前後で項分けをして扱う。

#### 1.1 暫定的組織による行事運営（1968-1971）

1968年6月26日午前0時「小笠原諸島返還協定」が発効し、午前6時政府代表、美濃部亮吉（1904-1984）東京都知事（当時）らが父島に到着した。正午、父島大根山の米海軍司令部前広場で小笠原諸島返還式、その後レセプションが開催された。同日夜、大村広場のテニスコート付近で全住民や来島者が出席し、返還記念の野外パーティが開催され、東京都小笠原支庁（以下、原則として支庁と表記）の職員が「汗だくで接待」した（辻1995a、68-69、74）。当時、父島に在住したのは、米軍占領下で帰島許可されたいわゆる欧

米系在来島民（1876年以前の移住者の子孫。以下、在来島民と表記）138人中129人と、支庁職員などに限られていた。

返還後、旧島民（明治以降の移住者）や支庁および小笠原村の職員、建設業従事者などの新島民や一時滞在者が徐々に小笠原諸島に渡った。1969（返還1）年6月26日には、美濃部知事を迎えて「村民主催」の記念式典が開催された。高校生が司会をし、知事ら来賓や代表者の祝辞や挨拶があった。同日夜7時から、来賓出席のもとで「村民パーティ」が行われた（辻、1995a: 106）。この時までには、式典と当日のパーティしか行われていなかった。

1970（返還2）年6月25日には、初めて記念前夜祭が行われ、浴衣姿の若沢・森コンビの「八丈太鼓」、上部ピンの「人生劇場」などが披露された（辻、1995a: 13）。村民参加による余興を主にした「返還記念祭」の始まりである。浴衣と八丈太鼓の組み合わせは、後の盆踊りへの発展を予感させる。翌26日には、「村民の誠意」で返還2周年記念式典が開催され、ソフトボール決勝戦と演舞会、夜にはダンスパーティが行われた。同年の人口は、ようやく782人となった（小笠原村、2016: 8）。

1971（返還3）年6月25日、前年と同様、記念前夜祭で村民による余興が「素人演芸大会」と名づけられて開催された。翌6月26日には、返還記念式典、アトラクション、ソフトボール決勝戦、武道大会、夜には村民会館でダンスパーティが行われている（辻、1995a: 158）。このように返還記念行事には式典後にもイベントが加わり、村民参加型エンターテインメントとしての性格を強めていった。その運営にあたっては、前夜祭の部、式典の部、スポーツの部の3部門にそれぞれ担当委員が配置されるかたちで、実行委員会が結成された。また、協賛行事として空手部・剣道愛好会・4柔道部主催の武道大会、小笠原ダンスクラブ主催のダンスパーティも企画された（小笠原村、1971）。

## 1.2 青年協議会発足と返還記念行事運営（1972-1974）

1971年12月、村に6か月以上居住する30歳未満の青年を会員資格者とする「小笠原青年協議会」が発足した。これは、職場などを通じて在来島民、旧島民、新島民が分け隔てなく交流していた若者世代が、自主的に設立したボランティア団体である。男女合わせて47人の会員のほか、準会員3人、参与3人が参加し、1972年1月から活動を開始した（小笠原村、1972）。準会員とは高校生、参与とは30歳以上の助言者のことである。関係者（70歳代）によると会費は無料で、ラドフォード提督学校の「かまぼこ宿舎」に事務局を置き、草刈り、海岸清掃、苗木植樹、台風の片付けなど日常的な活動をはじめ、宗教の違いを超えて結婚式や葬儀の手伝いもしたという。



図5 「盆踊り」(1973)

1973年6月 奥山泰子氏提供。

1972(返還4)年の返還記念行事は、雨による行事内容の若干の変更はあったものの、ほぼ前年度と同様であった(辻、1995a: 180)。1973(返還5)年の返還記念行事では、青年協議会長も自治会長、漁協理事、農協理事、体育協会会長と共に実行委員会に加わり、前夜祭、体育大会、植樹祭等が行われている(辻、1995a: 210)。この前夜祭で、青年協議会を中心に櫓を立てて「盆踊り」が行われた写真が残っている(図5)。青年協議会は、活動資金がない中で、各会員が職場の協力を得て余り材を借りてきて櫓を組むなどの工夫をしたのである。これによって、イベントとしての小笠原盆踊りの基礎が築かれたと見なせる。

だが、1974(返還6)年の返還記念前夜祭の記録には、演芸大会しか見られない。実は、同年11月2日、大神山例大祭前夜祭において「夜店、盆踊り」が行われている。11月3日例大祭当日には、大人用、子ども用の神輿が繰り出され、奉納相撲大会も行われている(辻、1995a: 261)。大神山神社は、太平洋戦争で焼失した。その復帰還座への要望が高まり、1972年に小祠が建てられ、1973年には都神社総代会より子供神輿一基と太鼓一台が寄進されたのである(辻、1995a: 169、231)。当時を知る60歳代関係者によると、大神山神社では何かの機会に盆踊りを催すことがあっても、お祭りの中心は神輿や後に加わった山車だった。大神山神社では、その後1977年11月1日の例大祭、1978年11月1日旧小学校校庭での櫓を立てての例大祭前夜祭、同11月3日の帰島10周年記念例大祭で盆踊りが行われている(辻、1995a: 345、373)。

ところで、1974(返還6)年からは母島でも、父島とは別の実行委員会を組織して記念

行事が始まった（辻、1995a: 210; 小笠原村、1974）。母島では、同年の返還記念祭から「盆おどり形式」のおどりも行われている。ただし、まだこれは「盆踊り」とは呼ばれていなかったようである（小笠原返還記念実行委員会、1975）。

## 2. 返還踊り期（1975-1979）

### 2.1 青年協議会主催の返還踊り期（1975-1979）

1975（返還7）年の返還記念行事は、青年協議会主催、小笠原体育協会共催、観光協会後援で実施された（小笠原諸島返還7周年記念祭実行委員会事務局、1975）。この時、前夜祭の「返還踊り」（6月24日～25日午後8時～10時）、当夜祭の夜店（6月26日朝から「演芸大会」終了まで）が新たに加わった（小笠原返還7周年記念祭実行委員事務局、1975）。青年協議会は、返還記念行事に参加型の踊りを取り入れることで新風を吹き込み、村民結集を促そうとしていたことが伺える。しかしながら、「村民だより」77号（小笠原村、1975）では、返還踊りについて触れられていない。

### 2.2 返還10周年記念行事と記念浴衣の製作（1978）

小笠原村によれば、1978（返還10）年の返還記念行事は、国、東京都、小笠原村からの補助金で、スタンプアルバム（小笠原郵便局）、手ぬぐい（同）が製作され、アオウミガメ記念放流（父島）、『村民だより縮刷版』発行（小笠原村、1978）、記念植樹が行われた。また、式典部、産業部、文化部、事業部から構成される実行委員会が立ち上がり、記念式典、演芸大会、返還踊り（父島）、小笠原太鼓と母島音頭（母島）に加えて、小笠原物産展（3月17日～22日、東急デパート渋谷東横店）、写真展（6月20日～27日）、記念たばこ・記念メダルの販売、打ち上げ花火大会も行われた。演芸大会には、村民に加えて歌手の安倍律子がゲスト出演している（稲田、1978b、1978c）。

そして、返還10周年を記念し、観光協会会長と内地業者の協力により「記念ゆかた」の反物が予約製作された。反物は1反約5,500円、帯は男物2,000円、女物2,300円で、3月20日～31日に島内の3つの商店で申し込みを受け付け、4月25日～5月5日頃に配布された。反物として販売したのは、寸法の間違いを避け製作時間を短縮するためだった。各自が仕立てることとし、1反2,500～3,500円の代金で仕立人も募集した（稲田、1978a）。和裁を手伝った関係者（90歳代）は、短期間にたくさんの浴衣を仕立てるのが大変だったと述べている。お揃いの浴衣を着て返還踊りを踊ることで、父島の人々の返還10周年への思いが高まったことであろう。また、踊りの輪には村の若者たちも加わっている（図6、図7）。



図6 返還10周年記念浴衣

1978年6月 大平京子氏提供。



図7 「返還踊り」(1978)

1978年6月 大平京子氏提供。

1979(返還11)年以後、返還記念式典は15周年、20周年など節目の年以外は行わないことと決定された。式典抜きであっても、1979(返還11)年6月25日、返還記念前夜祭が父島、母島で繰り広げられており、「小笠原太鼓、演芸会、島寿司、グッピー掬い、古本市などが人気」を呼んだこと、6月26日には「当夜祭が父・母島で行われる。夜空を彩る

花火の下で、盆踊りを楽しむ」との記録がある（辻、1995a: 406。下線筆者）。参加型エンターテインメントとして定着していた返還記念前夜祭、当夜祭の返還踊りは、記念式典なしでも開催されたのであった。ただし、記念式典を祝う性格ではなくなったことから、父島の踊りも母島の踊りと同じように「盆踊り」と呼ばれるようになったのかと考えられる。

### 3. 《小笠原音頭》の転換期（1980-1985）

#### 3.1 《（旧）小笠原音頭》振り付けの伝承断絶

1980（返還12）年の返還記念行事については、父島では6月26日の記念日に行事は特に行わないと決定された（辻、1995a: 441）。一方、母島では6月28日～29日返還記念祭が挙行され、夜は演芸大会、盆踊り、花火大会、昼はバドミントンやバレーボールとスポーツ大会が行われている。しかしながら、返還記念行事を行わなかった父島では、8月12日～14日青年協議会主催、観光協会後援による「盆踊り大会」が旧ラドフォード校庭で催されたのである（辻、1995a: 444）。父島では、返還記念行事と切り離されたことで、自然な流れとして返還踊りから盆踊りへと名称が変更され、さらにその開催時期も盆の頃になった。「村民だより」（小笠原村、1980）では、「今年も恒例により、夏の盆踊りを次の要領で開催いたします。曲も《炭坑節》から始まって《東京音頭》《1たす1》など、誰でもすぐにおぼえられるものばかり」だとし、毎週土・日曜日午後6時～8時、二見港船客待合所で行う太鼓、盆踊りの練習への参加も呼びかけている（下線筆者）。

そして、1981（返還13）年8月12日～14日に「観光祭り」と「盆踊り大会」が3晩行われている（辻、1995b: 29）。この記述からは、観光祭りと盆踊りという別のイベントがセットになって行われたという印象を受ける。この観光祭りが、後のサマーフェスティバルへと発展していったと考えられる。

ところで、現在も行われている《炭坑節》《東京音頭》は返還踊りを始めた当初からの演目であったし、大神山神社例大祭前夜祭でも踊られていたという（60歳代関係者による私信、2019）。また、返還直後からの盆踊り指導者には、浅沼正之氏がいた（80歳代関係者による私信、2019）。しかし、かつては歌詞とメロディが異なる《（旧）小笠原音頭》が踊られていた。《（旧）小笠原音頭》は、戦前父島に在留した日本兵がうたうのを聴いた高崎喜久雄氏が覚え伝えた（90歳代関係者による私信、2019）。《（旧）小笠原音頭》は東京都による1981年の調査でも採集されているが、無形民俗文化財（民俗芸能）の指定外となった（東京都、1987）。その第1番目の歌詞は、下記の通りである。

〈（旧）小笠原音頭〉（抜粋）

ハアー 東京離れてはるばると 尋ね尋ねて父の島  
ハアー 港二見の灯が見える みなおじゃれ小笠原  
ハアーヨイヤ 父島 ヨイトコリヤセ

歌詞の「東京離れてはるばると」より、作詞者が小笠原諸島出身者ではないことが明らかである。また、「みなおじゃれ」の「おじゃれ」は八丈語起源の「おじゃる（御座るに由来）」の活用形で、「いらしてください」という意味である（ロング・橋本、2005: 52）。小笠原で耳慣れた「みなおじゃれ」を使うことで、作詞者はこの歌を小笠原からの観光誘致の歌にしている。歌詞の続きでは、清瀬奥村、屏風谷、扇浦、洲崎…と父島の地名、「荒いワントネ」を越えて母島の地名があげられる。全体を七五調とする小笠原諸島巡りをテーマにした歌である。

〈（旧）小笠原音頭〉には、返還直後から 1980 年 3 月に退職するまで小笠原小学校で勤務した教員が振りつけをした踊りがあった（90 歳代関係者による私信、2019）。〈（旧）小笠原音頭〉は、青年協議会がイベントとしての盆踊りの基礎を築いた時期に踊られていたのである。現行の〈小笠原音頭〉に移行した時期については、1983 年に帰島した踊りの指導者による発言（80 歳代による私信、2019）、1983 年～1990 年に島外に出ている間に踊りが変わっていたという発言（70 歳代による私信、2019）により、1980 年代前半に絞られる。これは、次項で述べる現行の盆踊り歌〈小笠原音頭〉成立時期（1983～1984）とも一致する。2018 年返還 50 周年記念祭に際して、記憶されている〈（旧）小笠原音頭〉踊り歌に合わせて、鼓舞の会メンバー（60 歳代）の振り付けによる復元パフォーマンスが試みられた。

### 3.2 新しい〈小笠原音頭〉の成立（1983-1984）

盆踊り指導者の一人（80 歳代）は、1983 年島外から父島に戻って以降、青年協議会で 11 演目を教授したという。その中には、現在では踊られていない〈さくら音頭〉、〈交通安全音頭〉、〈常磐音頭〉などもあった。練習場所は、二見港船客待合所のほか、清瀬 2 か所、奥村、自衛隊の芝生、大村と 5 か所だった。また、保育園で〈ドラえもん音頭〉、〈あられちゃん音頭〉など、子ども向けの演目も指導した。振り付けは、全国共通のものであった（80 歳代本人による私信、2019）。

現行の盆踊り歌〈小笠原音頭〉が成立したのも、その頃のことだった。経緯に詳しい関係者は、1983（返還 15）年の返還記念祭がその成立契機だったと述べる（70 歳代関係者に

よる私信、2019)。返還 15 周年記念事業に際しては、小笠原村は「村民の連帯感を醸成する」「小笠原のすばらしさを世に訴える」基本方針を立てた。また、振興計画の最終年度でもあったことから、「次の振興へとつなげる節目」とされていた。そこで、村民の連帯感と島外へのアピールという目標に合った踊り歌が新作されたのである。

現行の《小笠原音頭》は、母島出身の石井章氏が東京で作詞し、プロに作曲を依頼したと言われる。作曲家とは、返還 10 周年演芸大会の安倍律子招聘でコネクションができた。返還 15 周年記念祭で踊り歌が披露された後、小笠原在住の日本舞踊経験者が振り付けをし、翌 1984 年から踊り始めたとのことである（以上、70 歳代関係者による私信、2019)。返還 15 周年事業への招聘者リストから判断すると、プロの作曲家とは杉田次郎氏かと思われる。

現行の《小笠原音頭》は、8 番までの歌詞がある。このうち 1 番の歌詞は、次のようである。

《小笠原音頭》（現行）

夢の島だよ 来てみてごらん  
花と緑と 蒼い海 蒼い海  
さわ さわさわ おがさわら  
さわらさわさわ おがさわら

前半は、七、七、七、五と都々逸の音数律からなり、「花、緑、蒼い海」と小笠原の魅力伝える言葉が並ぶ。「来てみてごらん」は、《（旧）小笠原音頭》の「おじゃれ」と同様、小笠原諸島から島外の人に向けての呼びかけとなっている。後半では、「おがさわら」という語の響きを強調する表現となっている。前半の歌詞では、2 番がマンゴ、パパイヤ、パイン、バナナ、3 番が亀と鶴、4 番が島の人情と海の色、5 番が赤いハイビスカスと島の娘、6 番が赤銅色の島の男、7 番が漁師と女房、8 番が父島と母島がうたわれている。鶴以外は小笠原に関係する情景であることから、1 番と同様の意図が伺える。

採譜例からは、このメロディには演歌によく用いられる「四七抜き短音階（イ短調だとラ、シ、ド、ミ、ファからなり、第 4 音のレと第 7 員のソが抜けている）」、4 分の 2 拍子にいわゆる「ピョンコ節のリズム（付点八分音符と十六分音符の組み合わせからなる）」が用いられている。音楽面からいえば、新奇性があるというよりは典型的な新民謡や盆踊り歌だと言える（図 8）。

日本舞踊の足さばきの基本は、すり足で上半身を上下に動かさずに移動することである。



動作が参加者の人気を呼んでいる（図9）。歌詞をわかりやすくするために、胸から波が引く様子を示し「サブザブザッブン」、風がさわさわと吹く様子を「さわさわ…小笠原」と言葉にして、後からつけ加えたという（60歳代関係者による私信、2019）。その結果、《小笠原音頭》は、村民はもとよりその場限りで形成される踊り手集団の連帯感を醸成する、観光資源の1つとなったのである。

#### 4. 観光資源化とブランド化（1986- ）

##### 4.1 サマーフェスティバルの開始（1986-1987）

1986年8月2日～22日、観光客向けのイベントとして第1回目のサマーフェスティバルが始まった。小笠原村との共催により、青年協議会会長を委員長、観光協会、商工会の代表者からなる実行委員会が主催した。イベントの名称は、公募で「OGASAWARA サマーフェスティバル'86」が選出された。期間中、おがさわら丸入港時には小笠原南洋タマナ太鼓の演奏と南洋踊り（2回）、オープン・レガッタとミニトライアスロン（「タートロン」）、花火、映画会、子ガメの放流、島対内地対抗カラオケ大会、バンド演奏が各1回ずつ行われた。中でも、タートロンは初めての試みであった。盆踊りと夜店は8月8日～10日の3日間があてられた。

現在、KAKAあるいはカカという名称で知られる小笠原産割れ目太鼓は、当時は小笠原南洋タマナ太鼓と呼ばれていた。1984年頃、メラネシアの割れ目太鼓をヒントに村民の娯楽として製作され始めたものだが、この時には観光客を出迎えるために演奏されたのである。同じく上演された南洋踊りとの共演は、この時にはまだ行われていなかったと思われる。南洋踊りは、1981年保存会が結成されての継承が始まっていた。これら小笠原の特徴的な音楽芸能と共に、村民による村民のための参加型エンターテインメントとして返還記念祭を中心に行われてきた盆踊りやバンドも、観光資源となる可能性が見いだされたといえよう。

実は、1987年6月30日に閣議決定された国土庁による「第4次全国総合開発計画」では、離島地域の産業振興について「離島の特性を生かした海洋性リゾートの整備を図るとともに、地域産業との連携を強める」ことが示されている。また、離島の新しい展開として、「特に、外海離島である奄美群島及び小笠原諸島については、特有の亜熱帯気候や我が国南端に位置する地理的特性を生かした振興開発を推進することが重要である」と記されている（国土庁、1987）。海洋性、亜熱帯という気候を活かしたサマーフェスティバルに組み込まれたイベントとしての盆踊りは、全国総合開発計画を背景にますます観光資源としての性格を強めていくことになった。

#### 4.2 返還20周年記念祭（1988年）

1988（返還20）年の返還記念行事は、節目として大々的に行われた。前夜祭での出し物としては、小笠原太鼓、2団体による日本舞踊、青年協議会による劇、「大食い大会」、曲芸、韓国舞踊、民謡とかつての素人演芸大会の流れをくむパフォーマンス、当夜祭では警視庁音楽隊イブニングコンサート、友好都市提携記念芸能交換会として「八丈太鼓」「武田節」「南洋踊り & KA-KA」、返還寄席が行われている。これに先立って1988年3月22日東京の百貨店で開催された「ふるさと東京の観光展」により、南洋踊りとKAKAの共演も恒例化していった。だが、この時には、盆踊りと夜店が行われた形跡が見当たらない。返還15周年をきっかけに新たな《小笠原音頭》が生まれたものの、盆踊りは観光を目的とするサマーフェスティバルのメイン・イベントとして定着していったことがわかる。

#### 4.3 小笠原観光協会と《まっこう音頭》（1995-2010）

1993（返還25）年の返還記念事業では、「小笠原発見400年記念式典」が行われた。返還20周年記念祭と大きく異なったのは、京都府北桑田郡美山町（現南丹市）在住のエルンスト・フリードリヒ・ザイラー氏（1934-2017）夫妻を招聘して、「ザイラーピアノデュオ」コンサートが開催されたことである。

その後、1995年には小笠原諸島の人口は2,047人となり、新しい移住者が増加している。にもかかわらず、青年協議会への参加者は次第に減り、20年以上続いた青年協議会による盆踊り企画運営が困難となった。そして、1996年までにサマーフェスティバルのイベントは小笠原観光協会内に設置された小笠原イベント協議会の主催事業として統合された（小笠原村総務課による私信、2019）。

1998（返還30）年の返還記念祭を機会に、小笠原盆踊りで太鼓の回し打ちを行っているボニン囃子が結成された。ボニン囃子は、小笠原に伝わる歌とオリジナルの旋律を組み合わせ、笛、太鼓、鉦を伴う祭囃子風にアレンジした演目を有する。このグループの代表者・平田青山氏が、同年創作したのが《まっこう音頭》である。《まっこう音頭》の振り付けは「間奏がないから踊り疲れる」（60歳代関係者）とも言われるが、オリジナル曲の1つとして若者の人気を呼んでいる。その1番の歌詞は、次のようである。

#### 《まっこう音頭》

長い船旅 ゆらりゆられて 小笠原  
ついてみれば 海の七色 お出迎え  
マッコウけっこう 小笠原

夢の花咲く 小笠原

マッコウけっこう 小笠原

とても楽しい 小笠原

《小笠原音頭》の歌詞が、小笠原諸島からの「島自慢」によって島外の人に向けて呼びかけるのに対して、《まっこう音頭》は島外から観光客として小笠原を訪れ、そこで楽しむという歌詞となっている。言い換えれば、《まっこう音頭》の主役は、観光客だと言える。

#### 4.4 《小笠原自然遺産音頭》とブランド化（2011- ）

内閣府は、2010年経済産業省にクール・ジャパン海外戦略室を設置し、分野横断による情報発信、海外展開、インバウンド振興にいたるまでに観光資源の磨き上げを画策した。文化面では、日本遺産の拡充とエコツーリズムの推進への取り組みを行っている（内閣府知的財産戦略推進事務局、2019）。小笠原諸島が2011年6月「豊かで独特な自然の価値が認められ」世界自然遺産として登録されたことは、クール・ジャパン海外戦略に寄与するネーム・バリューを得たことになる。小笠原で、世界自然遺産登録の応援歌として創作されたのが、《小笠原自然遺産音頭》（作詞：石田和彦、作曲：伊藤直樹）である。盆踊りとして振りつけをした関係者（80歳代）は、「小さいけれども平和でいられる島」をコンセプトに、扇子をもって船の中にイルカがもぐっている様子やシュツというときにクジラが頭を出す様子を表現し、動作をそろえるのに合いの手を入れたという（80歳代本人による私信、2019）。また、《小笠原自然遺産音頭》を広めるために、「世界遺産シスターズ」が結成された。世界遺産をアピールする盆踊りは、他には見られない小笠原独自のもの、すなわち「小笠原ブランド」そのものだといえよう。

2018年～2020年、小笠原商工会が「ブランド主催者」としてウェブサイトを構築している（小笠原商工会、2020）。ここでは、モノとしての商品が紹介されている。一方、これまで見てきたように、コトとしての小笠原盆踊りというイベントも、国、東京都、小笠原村の政策に沿って、小笠原ブランドとして確立されてきたといえよう。

## IV. 原点回帰と故郷の創生

盆の行事とは無関係に成立してきた小笠原盆踊りは、参加型エンターテインメントとして小笠原諸島の地域振興に貢献してきた。小笠原盆踊りを含む音楽活動を見るかぎり、「『島民のカテゴリー化』はあまり意味がなく、むしろ偏見として社会研究の妨になる」と

いう指摘もある(宍倉、2017: 373)。本稿では、そこに至るまで1970年代以来の青年協議会の活動があったことを論じてきた。彼らは、在来島民、旧島民、新島民の3層分け隔てなくボランティアを行い、異なる背景をもつ小笠原諸島の社会集団を結集するために返還踊りを創始したのであった。さらに、返還後50年以上が経った現在、成人した新島民の2世代目も含む「島っ子」やさらにその子ども世代がいる。島っ子にとって小笠原諸島は故郷であり、その次世代にとっては父、母の故郷である。島に留まりながら本土を往来したり、進学のために島外に出て一時帰島あるいはUターンしたりする彼らにとって、小笠原盆踊りは故郷の踊りでもある。

これまで論じてきたように、返還記念祭から独立した盆踊りがサマーフェスティバルの一環に組み込まれ、主催者が青年協議会から観光協会に移るという過程を経て、小笠原盆踊りが確立してきた。その中で、踊りの主役は村民から、観光客に取って代わられたようにも見える。ところが、小笠原盆踊りに参加する複数の関係者から、意外にもその目的が死者の歓待と鎮送という、盆踊りの原点に繋がるような話を聞いた。すなわち、「パートナーに追従して父島に生活拠点を置いたのだが、死別してしまった。自らは留まることを決意して暮らしてきた」といった具合である。彼らにとって、小笠原盆踊りを踊る時間はパートナーと過ごした日々を追憶し、自らの生を確認し、これから生きるための力を得るための貴重な瞬間ともなる。

一方、東京から24時間の父島までの船旅を経て、年1回小笠原盆踊りに参加することは、彼らが自らの生を振り返り、確認することにもなるだろう。小笠原諸島に来て踊ることは、単に盆踊りを踊って楽しむという、身体的快楽を超えた非日常的な体験となる。踊り手の一群は、あたかも見えない力に動かされているように映る。人々が一体となって踊ることは為政者にとって脅威でもあることから、過去には盆踊り禁止令が出された。一方で、現在は東京オリンピック開会式でラジオ体操、閉会式で《東京五輪音頭2020》を踊って盛り上げようという、国家的盆踊り普及キャンペーンが展開されている(りぶる編集部、2019)。ナショナリズムの風潮の中で、盆踊りが利用されることには注意をする必要がある(藤本、2017)。とはいえ、歴史を振り返れば1572年の大念仏は、「去年討死衆」を弔うために「敵味方参詣の群集」しておこなわれたものであった(池上、2016: 6-24)。勝者と敗者、生きる者と亡くなった者が出会う場が盆踊りでもあった。島っ子もその子どもたちも、いつか祖先歓待と鎮送の意味を込めて小笠原盆踊りを踊る日が来るかもしれない。小笠原盆踊りは、島にとどまり続ける魂と、島を往来する人々の生とが一体化する場を提供している。

## 謝辞

本稿に関する調査では、渋谷正昭副村長、杉本重治総務課長、とりわけ総務課企画政策室セーボレー孝氏に全面的にご協力いただきました。また、客員研究員として受け入れ、小笠原研究施設利用を許可していただいた首都大学東京には感謝しております。父島では、大平京子氏、辻トメ子氏、塚本昭子氏、河野二男氏、稲田正信氏、鈴木勝美氏、菊池歌子氏、守婦俊枝氏、門出京子氏、横谷みどり氏、奥山泰子氏、西本誉氏、山口真名美氏、高野一海氏をはじめとする多くの皆様よりご協力を賜りましたことを心より御礼申しあげます。

なお、本稿における調査の一部はJSPS 科研費 JP18H00637 の助成を受けて行ったものです。

## 文 献

- 藤本 愛 (2017) 東京五輪音頭からみる盆踊りとナショナリズム. 教養諸学研究 143: 47-71.
- 池上 良正 (2016) 日本における死者供養の展開・略年表 (7～16 世紀). 駒澤大学総合教育研究部紀要 10: 1-31.
- 稲田 正信 (1978a) 小笠原諸島返還記念祭実行委員会会報. 事務局だより 2 号.
- 稲田 正信 (1978b) 小笠原諸島返還 10 周年記念祭実行委員会会報. 事務局だより 5 号.
- 稲田 正信 (1978c) 小笠原諸島返還 10 周年記念祭実行委員会会報. 事務局だより 6 号.
- 国土庁 (1987) 第 4 次全国総合開発計画.
- <https://www.mlit.go.jp/common/001135927.pdf> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 3 日)
- 小西 潤子 (2002) 歌や芸能の越境とアイデンティティの創造—「小笠原の民謡」のアレンジをめぐって—. ダニエル・ロンゲ (編) 『小笠原学ことはじめ』南方新社, 162-193.
- 小寺 融吉 (1941) 『郷土舞踊と盆踊』桃蹊書房, 353p.
- りぶる編集部 (2019) 松島みどり・インタビュー—松島みどり広報部長に聞く伝統文化の盆踊りとラジオ体操で東京 2020 大会を盛り上げる. リブル 38 (1): 4-10.
- ロンゲ ダニエル・橋本 直幸 (2005) 『小笠原ことばしゃべる辞典』南方新社, 364p.
- 内閣府知的財産戦略推進事務局 (2019) クール・ジャパン戦略について.
- [https://www.cao.go.jp/cool\\_japan/about/pdf/190903\\_cjppt.pdf](https://www.cao.go.jp/cool_japan/about/pdf/190903_cjppt.pdf) (最終閲覧日: 2020 年 3 月 3 日)
- 日本全国「三大祭」ガイド (2020) 日本三大盆踊り.
- <https://www.3maturi.com/nippon/bonodori/> (最終閲覧日: 2020 年 3 月 3 日)
- 西角井 正大 (1999) 盆踊り. 福田 アジオ・神田 より子・新谷 尚紀・中込 睦子・湯川 洋

- 司・渡邊 欣雄（編）『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館, 551-552.
- 小笠原返還記念実行委員会（1975）第2回（母島）実行委員会記録, 5月2日付.
- 小笠原返還7周年記念祭実行委員事務局（1975）小笠原返還7周年記念行事のお知らせ, 5月21日発行.
- 小笠原村（1971）村民だより 31, 6月19日付. 小笠原村（1978）『村民だより縮刷版—返還10周年を記念して—』, 58.
- 小笠原村（1972）村民だより 38, 1月28日付. 小笠原村（1978）『村民だより縮刷版—返還10周年を記念して—』, 73.
- 小笠原村（1974）村民だより 64, 5月21日付. 小笠原村（1978）『村民だより縮刷版—返還10周年を記念して—』, 128.
- 小笠原村（1975）村民だより 77, 7月7日付. 小笠原村（1978）『村民だより縮刷版—返還10周年を記念して—』, 155.
- 小笠原村（1978）『村民だより縮刷版—返還10周年を記念して—』, 238p.
- 小笠原村（1980）小笠原村民だより 138, 7月31日付. 小笠原村（1988）『村民だより縮刷版第3集（第119号から第267号）—村政確立10周年を記念して—』, 33.
- 小笠原村（2016）小笠原村人口ビジョン・総合戦略（素案）.  
[https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/wp-content/uploads/sites/2/files1/ogasawara\\_vision.senryaku\\_an.pdf](https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/wp-content/uploads/sites/2/files1/ogasawara_vision.senryaku_an.pdf)（最終閲覧日：2020年3月3日）
- 小笠原諸島返還7周年記念祭実行委員会事務局（1975）小笠原諸島返還7周年記念祭関連行事日程.
- 小笠原商工会（2020）小笠原ブランド.  
[https://ogasawara-shokokai.jp/brand/?page\\_id=560](https://ogasawara-shokokai.jp/brand/?page_id=560)（最終閲覧日：2020年3月3日）
- 坂本 要（2015）踊り念仏の種々相（1）—空也及び空也系聖について—. 筑波学院大学紀要 10: 69-79.
- 坂本 要（2016）踊り念仏の種々相（2）—導御・一向・一遍・他阿—. 筑波学院大学紀要 11: 115-127.
- 宍倉 正也（2017）辺境からの音楽的視点—小笠原の事例より—. 渋谷 淳一・本田 量久（編）『21世紀国際社会を考える』旬新社, 370-379.
- 田中 久雄（1999）盆. 福田 アジオ・神田 より子・新谷 尚紀・中込 睦子・湯川 洋司・渡邊 欣雄（編）『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館, 550.
- 東京都（1987）『東京都文化財指定等議案説明書』東京都教育庁社会教育部, 90p.
- 辻 友衛（1995a）『小笠原諸島歴史日記 中巻』近代文藝社, 453p.
- 辻 友衛（1995b）『小笠原諸島歴史日記 下巻』近代文藝社, 437p.